

【中学生の部：会長賞①】

「学んで何だ？」

兵庫県・加古川市立山手中学校
3年 野崎 晴穂 さん

学ぶことは、自分の人生の中で大切なことだと思う。私達は毎日のように学校や塾、そして家でも勉強をさせられている。でも生きていの中で学ばなければいけないことは、数学や英語、国語以外にもたくさんあるだろうと私は思う。なぜなら私は知っているか知らないかの差、学んでいるかいないかの差で、こんなにも行動に違いが出るのかと思った出来事があったからだ。

友達に聞いた話なのだが、ある学校の先生が、当時担任をしていた生徒にからかい半分で「特別支援学級行ってこい！」と言ったらしい。私はその話を聞いて衝撃を受けた。そして怒りがこみ上げてきた。道徳の授業では生徒に「人権を大切に」という話もしているはずだし、生徒が差別的な言葉を使ったら注意をするのが先生なのになぜそんなことを言えるのかと、しばらく理解できなかった。そんな先生が、障がい理解のある生徒を増やすことなんてできるのだろうか。疑問に思った。

また、私は今住んでいる集合住宅から、近くの住宅街へ引っ越すことが決まり、先日、新しい御近所さんにあいさつをしに周った。まず父が母を紹介し、私の方を指して「長女で山手中の三年生です。」弟の方を指して「長男で、特別支援学校五年生です。」と家族の紹介をする。一通り紹介し終わった後の御近所さんの反応はだいたい「中三なんやー」とか「山中なんやー」といったさしさわりのないそれも私に対しての反応だ。でも私は「もっと聞くことあるやろ！普通弟の方に触れるやろ！」と心の中でつつこむ。みなさん感じのいい方だったので、これが一般常識なのかとも思ったけれど少し違和感を覚えた。しかし最後の一軒を周った時の感覚は違った。その家の女の人は、父の家族紹介が終わると真っ先に弟へ近より、視線を合わせ

「おばちゃんと握手しませんか？」

と弟の手を握り笑顔で握手をしてくれたのだ。私は感激して思わず笑顔になった。話を聞くとその女の人は、近くのデイサービスセンターにボランティアに行っているらしい。

「こうやって握手をして元気ももらっているんですよ。」

と、それからもしばらく握手をしてくれていた。弟もなんだか嬉しそうだった。

私や私の家族は弟のことを聞かれたりするのをいやだとは思っていない。も

っと言うなら、スルーされて何も分かってもらっていない方がいやだ。あの女の人は障がいがある人のことを理解してくれている。つまりどこかで自分なりに学んだということだろう。

しかし、あえて聞かなかった人や先生の気持ちが分からない訳でもない。私が小学校の低学年くらいまでは、友達に弟のことを聞かれると、どう説明すればいいのか分からなくて困ってしまい、弟のことを話すのがいやだと思っていた。でもそれは、弟のことをまだちゃんと分かっていなかったからだと今になってみると思う。たぶん、わざと聞かなかった人もあの先生も、小さいころの私の心境と同じだ。小さいときの私と同じように、何もまだ学べていないから自信を持って聞けないのだと思う。

おばちゃんの

「こうやって握手をして元気をもらっているんですよ。」

という言葉を知るだけでは、分からないかもしれないが、障がいのある人にあるあの独特ともいえるオーラは私達を優しく豊かにしてくれる。障がいのある人に誹謗中傷をするのは、障がいがある人を理解することから逃げているからだ。せっかく自分の人生の中にそんな機会ができたというのに。

もしどこかで障がいのある人と出会ったら積極的に話しかけてみることも大切だと思う。そこで少しでも自分にとっても相手にとっても、お互いにプラスになる関係を築いていくことが、学ぶことにつながっていくのではないだろうか。私も弟や障がいのある人に限らず、これからの人生の中で相手とお互いにプラスになる関係をたくさん築いていきたい。